



昨年11月23日に行われた点灯式での記念撮影。参加者のやわらかな笑顔が印象的



Look Back on 2013
4年目。11世帯14軒が取り組む。壁面を利用した立体的な作品が見られるようになる



Look Back on 2012
3年目。9世帯11軒が取り組む。点灯式を行い、記念撮影を行うようになった



Look Back on 2011
活動を始めてから2年目。5世帯6軒が取り組む。クリスマス用の電飾が利用したものが多い



Look Back on 2016
7年目。25世帯30軒が取り組む。LEDのチューブを使った一筆書きで個性豊かな作品が作られた



Look Back on 2015
6年目。15世帯20軒が取り組む。LEDを数多く使った作品が増え、色や配置にもこだわりが



Look Back on 2014
5年目。13世帯17軒が取り組む。参加者が増え、格段に街並みが明るくなる



Voice

佐藤 好彦さん

profile さとうよしひこ
事務局として同好会をけん引。新たな飾りを作り続けるアイデアマン。

暗闇で見つけた「地域の新たな価値」

始めてよかった。それが率直な感想です。活動は自主性を重んじています。義務にしない、人任せにしない。これがモットーです。「イネ」と反響があるとうれしい。楽しいからこそ続けられるのだと思います。

本宿のイルミネーションは、地域の人

ちだけでなく、遠くから足を運んでくれる人たちの絆もつないでくれます。真っ暗で何もなかった街並みに新たな価値が生まれました。何よりも「次はこうしよう」と、地域の人たちと未来の話ができることがうれしい。電飾は来年1月7日まで行っています。



1 そろう足並み/本宿イルミネーション街道 小さな光は地域の絆

止まらない地域の老化

室根町津谷川。その南に位置する第18行政区は、上川原、下川原、中磯、向平、本宿の5つの字からなる。68世帯185人が暮らしている。

同区の高齢化率は、10月末現在で49・7割。およそ二人に一人が65歳以上となっている。そのため、川の清掃や道路の草刈りといった共同作業を行うことが難しい。「地域の老化」は年を追うごとに厳しさを増している。

そんななか「明るさだけは失わず、生き生きと暮らそう」をモットーに地域を明るく電飾する人たちがいる。彼らの名は「中津谷川イルミネーション同好会」。その活動を追った。

闇を照らした二つの光

2010年11月23日のことだ。商店の数が減り、徐々に光を失っていった本宿地域の街並みにポツリと灯りが点った。2軒の家が、庭先にはなく、本宿地域を南北に通る県道18号本吉室根線に向けて電飾を施したのだ。

「夜ともなれば、通りは真っ暗になる。少しでも明るくできないかと始めた」と中津谷川イルミネーション同好会の事務局、佐藤好彦さん(64)は当時を振り返る。しかし「物好きな人が行う取り組み」と誰にも気にはとめなかったという。

そこで、佐藤さんは、翌年から「よかつたら、一軒一飾、本宿の通りを明るくしませんか」と根気強く近所の人たちに声をかけ続けた。

すると「少しぐらいなら」「面白そう」と翌11年は6軒、12年は11軒、13年は14軒と、徐々に仲間が増えていった。点灯した灯りは徐々につながり、いつしか線を描いた。

毎年11月23日に行う「点灯式」に向け、有志たちは思いの電飾を施すようになった。それぞれが、顔を合わせれば「今年はどうする」と、共通の話題で盛り上がるようになった。

活動の輪が広がると、作業の難しい高齢者や、長期にわたって留守にしている人からも「参加したい」という声がかかるようになった。

佐藤さんたちは「もちろん」と快く応じ、手分けして高齢者宅や空き家に電飾を施した。道路をまたぎ、向かいの家にも灯りが点る。線は面になった。通り周辺は、いつしか「本宿イルミネーション街道」と呼ばれるようになった。

継続の秘訣は「楽しい」から

華やかな見た目と「明るさだけは失わない」という熱意は、マスコミの取材を受けるようになった。そこで「中津谷川イルミネーション同好会」と名乗ることにした。堅苦しい規約や会費は定めず、あくまでも参加者の自主性を尊重した。また、補助金や交付金は受け取らないことにした。「活動を義務にしたくない」は、故・佐藤豊三郎会長の言葉だ。有志たちは、楽しいと思える人たちが活動を続けようと互いに誓い合う。会員数は32軒に増えた。本宿地域の真っ暗だった冬の街並みは素敵なキャンパスになった。今年も赤青黄色、色とりどりの電飾がキラキラと輝いている。

悩まされたら聞いて聞くと

佐藤 浩さん 室根町津谷川・56 身の丈に合った取り組みを

規模や内容は、身の丈に合わせて心掛けています。無理は禁物。続かなくなります。年々反響が増えているので来年はどうか「頭を悩ませています。うれしい悲鳴です。



やりがいに気づいて聞くと

佐藤 浩也さん 室根町津谷川・52 地域の盛り上がり到手応えを感じる

子供の頃は神楽や盆踊りなど、地域のイベントがたくさんありました。最近はずっと寂しくなりました。イルミネーションに取り組むようになり、にわかに地域が活気づくところにうれしさを感じます。

